

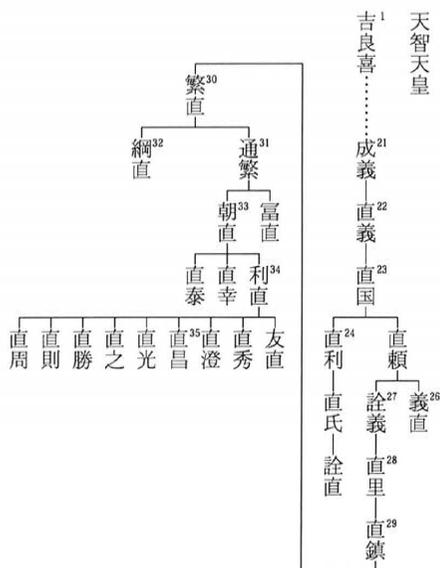
第三章 大除城と大野氏

一 大除城主大野氏と久万山

1 鎌倉時代の小田・久万郷

中世の久万山の中心となるのは、道後湯築城主河野氏の部将で大除城主大野氏である。大野氏に関する記録としては、「予陽河野家譜」をはじめ、この地方の旧家に「熊大代家城主大野家由来」「大野直昌由緒聞書」「大野家四十八家の次第」などが残されているが、ほとんど同文であって信用し難い記事も多いので、ここでは正史に照して信用できる大体的ことがらを記すことにする。

大野系図



第三章 大除城と大野氏

「吾妻鏡」卷一七、建仁三年（一一一三）四月六日の条に、河野通信が年末鎌倉にいたところ、たまたま暇を得て明朝帰国するという時に、頼家將軍より御教書を賜わり、伊予国守護佐々木三郎兵衛尉盛綱の命令を受けることなく、国内の近親郎従を指揮することを許されているのは有名な事実であるが、更に同卷、元久二年（一一〇五）閏七月二十九日既に將軍は三代実朝となつていたのであるが右の特例を裏付けするような記事がある。すなわち幕府は、伊予国の御家人三二人に守護の指揮を止めて通信の統率下においたというので、その三二人の名前が列記されている。その中、一七名ほどの名乗りに現在の地名と符合するものがある。

浅海太郎頼季 浮穴社太夫高茂 田窪太郎高房 垣生太郎清員
井門太郎重仲 余戸源三入道 久万太郎大夫高盛 日吉四郎高兼
別宮大夫長員 三島大祝安時 寺町五郎太夫信忠

などで、これらの御家人たちは河野氏と特別な関係があったらしく、名乗りの地名が高縄山を挟んだ北・中予地区に限られる所からみて、河野氏の勢力圏が偲ばれる。

久万・寺町などの浮穴郡山方に属する地名は、この地方を根拠とする御家人がいたのであるかと考えられる。ただ、大野系図には太田六郎、太田十郎、あるいは久万弥太郎、久万小太郎などと、太田、久万が盛んに出てくるのであるが、吾妻鏡と同名の者はない。彼らは御家人とまでいかぬ地方有力者だったろうか、あるいは架空の人物であろうか。

大野系図一九代の綱頼は承久三年宇治橋で討死、二〇代成俊は一〇〇余歳で元寇に軍功あり、二三代直国は同じく元寇の軍功によって肥前神崎郷に土地を賜わり彼地に移り、二四代直利が家を継いだとしている。

2 南北朝時代の犬野氏

貞治三年、南朝年号では正平一九年（一三六四）の末、阿讃の細川頼之が伊予に侵入し、湯月城の河野通朝は周桑郡三芳町にある瀬田山に進んで防いだが敗れ、自害した。その子通堯は北条市難波の恵良城にこもって細川勢を防いだが抗しきれず安芸国能美島に逃れ、更に九州に走って南朝方に降り、征西將軍懷良親王に従って名を通直と改め、筑紫にとどまっていた。

正平二二年一二月に義詮將軍が死去し、北朝側の動搖に乗じて伊予国では、河野通堯配下の吉岡、大野、森山らが活発な行動を開始した。この報を受けた京都では、正平二三年、仁木義尹を將として伊予国に差し向けた。伊予の北朝方に迎えられた仁木軍は宇和・喜多の方から兵を進めて、山方衆の根拠である浮穴郡大田で一大決戦を試み、遂に大野、森山らは敗れ、ことの次第を九州にある通堯に報じた。この時、北朝の仁木義尹を迎え撃ったのは、二六代義直及び父直頼であって、この時の大野にも二派あって、義直の弟詮義は北朝に通じ、細川頼有の感状を貰っている。

南朝側の敗北の報を受けた通堯は、やがて九州をたつて六月三〇日、伊予郡松前浜に上陸し、北朝側の完草入道、同出羽守らと戦って勝利をおさめた。通堯の軍には土居、西園寺、山方衆らに加わって意気大いにあり、温泉郡大空城に完草入道を討ち、花見山城を陥れ府中を攻めた。翌正平二四年（一三六九）八月には新居、宇摩郡に向かい、一月に新居郡高外木城で大いに細川軍を破った。こうして通堯を中心とする伊予の南朝方は大いに振い、この年に四国の総大将として若宮良成親王を迎え

ようとする計画もあり、懷良親王も東征を企てられるというように、肥後の菊池氏と呼応して優勢となった。建徳二年（一三七二）には征西將軍から通堯は伊予国守護職に補せられている。

こうした中で大野詮義は、松前合戦に利なく大田に帰城したが、やはり細川方であって働いていたと見え、応安五年（一三七二）に頼有から出された次の文書がある。

予州に於て忠節を致すの条、以て神妙也、弥、戦功を抽んずべきの状如件

応安五年十一月十三日

細川右馬頭頼明

大野十郎左衛門尉殿

しかし、西国の南朝軍も応安四年（一三七二）今川貞世が九州探題となつてからは振わなくなる。こうした情勢の中にあつて、通堯も大勢に順応して將軍方に帰したもののらしく康暦元年（一三七九）七月八日、義満から伊予国守護職に補せられている。

この年の閏四月一四日、管領細川頼之は失脚し、讃岐に帰った。同じ將軍方であっても河野氏と細川氏は元来宿敵の關係にあり、加うるに九月五日、義満將軍から頼之誅罰の御教書が通堯にも発せられた關係もあつてか、頼之の軍が伊予国に侵入してきた。

一方、河野通堯は、これを迎え撃つため、宇和郡の西園寺公俊とともに周桑郡佐志久原に出陣し、大いに細川勢と戦つたが一月六日、武運つたなく討死した。この時、通堯の二子、兄の亀王は一歳、弟鬼王は九歳であったが、これ以後河野家は全く振るわず、衰亡への道を辿ることとなった。

また、大野家について言えば、当主義直及び父の直頼は通堯とともに

佐志久原で討死し、二七代の家督は細川頼有らの推挙によって詮義と決定した。

3 大野氏の消長

大野家二八代直里は通称を弥次郎、応永二五年（一四一八）に將軍義持から伊予国における軍功によって、道後分の岡田北名田職を賜わり、また永享四年（一四三二）、大野宗家の人と見られる明正から、大田本郷及び久万を譲り受けている。「大州隨筆」所収の文書に、

太田之内本郷久万之事、ゆつり奉也、此内中川之事、さけうニやくそくして候へば、とうせられて、就中掛身之事さしおかるべく候、後々の事下きようあるべく候、依爲後日如件

永享四年六月廿日 明 正（花押）

大野弥治郎殿

とある。直里は後に細川満元の書状を受けて土佐に出陣し、討死している。

二九代直鎮は上野介、宮内少輔。文安元年（一四四四）に河野教通から明正所領分を安堵されたほか、余戸市坪に一か所、桑原領家職一か所、砥部宮内一か所、寒水東方一か所などの所領を与えられている。大野氏の本拠は小田であったと思われるが、山分だけでなく里分へも漸次勢力をのびして行ったようである。この人の歿年を文安六年（一四四九）七月二〇日としている。

三〇代繁直は応永二七年（一四二〇）の誕生で幼名な熊法師丸、長じて弥次郎、備前守と称する。宝徳二年（一四五〇）四月に義政の將軍職就任の質に上洛して宮内少輔に任じられ、同年一〇月、土佐国の津野之高討

伐を命ぜられて出陣している。

津野氏は土佐の国の七人守護の一人で高岡郡羽山城に拠り、領地の北境は禰原^{なまはら}で伊予国久万山と相接している。当主之高は、実は伊予国河野氏の出で、母が津野氏から来ていたので、その縁で津野春高の養子となった人であるが、何か將軍家からにらまれる事情があったのか、土佐に近接する大野氏に討伐が命ぜられたものと見える。

繁直は幕府から土佐の津野氏討伐を宝徳二年の末に命ぜられ、翌三年に土佐に攻め入り、六月一日の合戦で手疵を被っている。大野氏の不幸はこの後に起こった。戦況報告のためにか、この年の夏に上洛した繁直が、帰途兵庫において暑さのため狂死し、かつ讒言する者があって家が断絶した。

繁直に男子が二人あった。兄の通繁は幼名尺法師丸、永享十一年（一四三九）の生まれで、一三歳の宝徳三年（一四五二）に河野家の通春を烏帽子親として元服し、四郎治郎と名乗ったが、凶らずもこの悲運に見舞われ、弟の武熊丸綱直と共に、遠縁に当たる富永安芸守時義（二六代義直の子）の所領、喜多郡宇津村に身を寄せることとなった。

一方、大野氏不在の小田、久万地方の形勢は不穩を告げた。久万に出雲入道という者の勢力が強大となって、長祿、寛正のころ土佐勢を手引きして、しきりに小田郷の侵略をはじめた。小田郷の日野・林・安持・土居の四家は、これに対抗するため種々相談の結果、由緒ある大野家の兄弟を喜多郡から迎えて將と仰ぎ、久万出雲入道と一戦に及ぼうという工作を開始した。

このことについては、大野家との縁につながる美濃の土岐成頼が將軍

義政にとりなす所があり、通繁、綱直の兄弟は大田土居城に迎えられ、家名を再興することができた。寛正三年（一四六二）八月三日、大平中務大丞を上京させて、將軍家にお礼として料足二〇貫文を献じている。

こうして大野兄弟を將とする小田勢は、寛正五年（一四六四）に久万出雲入道を攻めてこれを討ち取り、やがて兄弟は大除城に移ることになった。そして重見通熙、森山範直、重見元康ら連名の証文を得て、出雲入道のあと三〇〇貫の地を領するようになった。

4 応仁の乱と大野氏

応仁元年（一四六七）に起こった細川勝元対山名宗全の、いわゆる応仁の大乱において、大野氏三代通繁の去就はいかがであっただろうか。もちろん当時の大野の勢力は、伊予の総帥河野氏の下にあったはずで、この乱における河野の動きにより大野の去就も察知されるわけである。

ところが、この時の河野の去就については諸説あって、今にわかには断ずることができない。当時河野には、湯月城にある河野宗家の教通と、東予を根拠地としたと思われる予州家の通春がいたが、両家の間にはしばしば内抗があった。「予陽河野家譜」によれば、予州家の通春は一族を率い東軍細川方にくみして忠戦しており、宗家教通は細川家との長い反目から、周防の大内政弘と通じて西軍の山名方に加わったとしている。

これに対し、「築山本河野家譜」には、河野通春は大内政弘に従って京に上り、二〇〇余騎をもって摂津の小町埴で東軍細川方の赤松政則の軍と戦い、自ら手創を負ったが大いに軍功あり、凱歌をあげて入洛し、在京一三年とあるが、宗家教通については何も記録されていない。

また、「経覚弘要抄」によれば、伊予の河野氏は大内政弘と共に西軍に

加わる。とあって通春、教通のいずれとも判明しない。

しかし、一方、大野氏関係の文書を見ると、いろいろ疑問な点もあるが、応仁の乱の進退に関する限り一致している。すなわち、湯築の河野宗家は東軍細川方であり、大野もこれに従ったが、縁につながる土岐成頼、河野通春のすすめに従って途中で西軍山名方に加わったというのである。この大野家に関する記録は、どの程度信用していいものだろうか。

この応仁の乱における河野両家の進退について、郷土史家景浦勉は「応仁の乱では河野氏は本家も予州家も西軍山名氏に属したのである。

『予陽河野家譜』はこれまでの通春、教通の小ぜり合いが未解決のまま応仁の乱に突入したため、同陣営にあっても反目していたし、乱後も対立するのでこのように記述したのであろう。」と注目すべき見解を発表している。

5 大野氏と大除城

応仁の乱は一年続き、京の町を焼き払って文明九年（一四七七）に終わったが、郷国に帰った諸將は敵味方それぞれ怨恨を含み、かつ自領の拡大を企てて、全国は戦乱の世と化した。これがいわゆる戦国時代である。

文明十一年（一四七九）、細川義春は阿讃の軍勢を率いて伊予国に進功して来た。この共同の敵に対して予州家の通春も湯築本家に協力して善戦し、西讃に撃退することができたが、その後は再び反目が続いた。応仁の乱のとき、大野通繁は伊予にいて西軍山名方として数度の戦功があったが、通春に通ずる彼の立場は湯築河野家と不仲となり、混乱の中で長享二年（一四八八）一月四日に討死している。

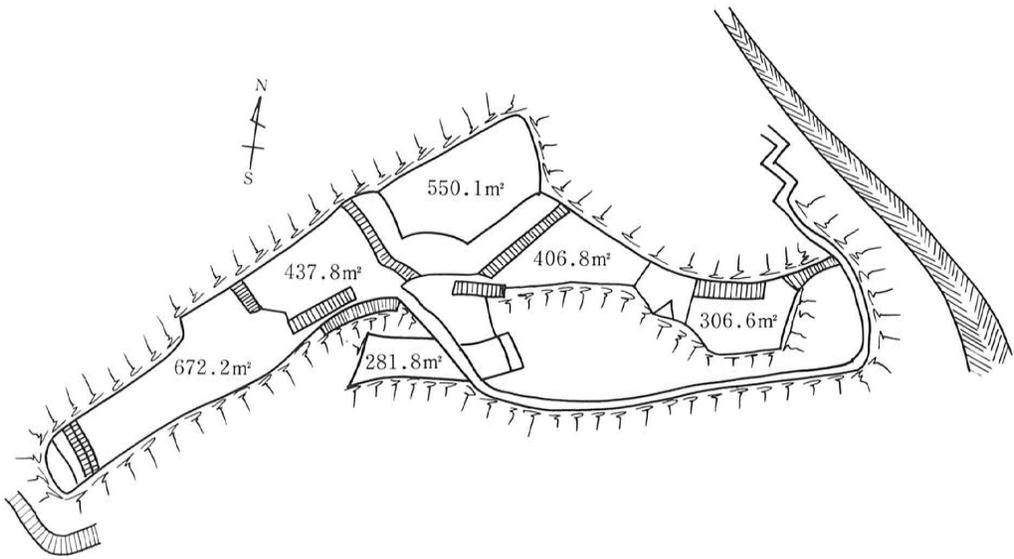


大除城址遠望

通繁討死のあとは、長子富直が早世したため、通繁の弟の綱直が四四歳で三二代の総領となった。その後も引き続いて戦いが行われたが、明応元年（一四九二）に綱直と湯築の河野通秋の間に和議が整い、嗣子朝直（実は通繁の次男）と通秋の娘の婚儀が成立し、同九年三月一五日、本領安堵の御教書も発せられた。

三三代朝直は文明三年（一四七二）七月一八日の誕生で幼名千寿丸、同一五年に一三歳で元服、同年大田郷上川村の蔵王大権現を中原景義に命じ、再興させる等のがあった。永正五年（一五〇八）、三八歳で大内義興とともに上京し、三好合戦に加わって負傷して將軍義植から懇ろな言葉を受けたりしている。翌年六月大除に帰り、七年家督をうけ左近將監安芸守に任官した。

大野氏の拠った大除城址は国道三三号線が三坂峠を越して明神を過ぎ久万町に入ろうとする左手、仰西渠の遺跡から川をへだてて見上げる高さ約二〇〇呎の山頂にある。南北に流れる久万川が山麓をめぐり、川に沿う街道筋を扼する要害の地^{けやき}にあつて、平常居館のあつた^{けやき}槻の沢部落から城址に登ると、久万盆地が一望のもとに望まれ、西南方指呼の間に幕下の番城入野天



大除城址 (1955.6.12測量)

神森城址と相對して、三方切り立った険しい地形で屹立している。東側だけが裏山の「茶蔵」に続き、この地点にはから堀や石のいで防塞を施し、それに続く裏山の所々にも大がかりな防禦工事の跡が残っている。城址は「天守台」と称する高台を中心に南方予土国境に向かって、扇形に二段ずつ東西に広がり、天守台の裏手には、苔むした石垣が往時を偲ばせ、昔より「入らず」と称した城山東麓には、今は水が枯れてしまっているが古井戸も残っている。

また山麓の槻の沢には、殿様が使ったという不浄の者を忌むつゝ、「馬場柿」と称する柿の古木、直昌屋敷と伝えられる俗称「そえの畑」等があり、ホノギとして「かまえ」「射場」「堀」「城の岸」「古寺」「蔵が森」、家号として「中鍛治」「射場」、地名として「鍛治屋敷」「店町」「茶蔵」等が残っている。また、裏山には俗称「直昌つつじ」と称するひかげつつじが群生し、これを他の場所へ移すと必ず枯れるという伝説が古くから部落に伝わっている。もちろん当時の城は兵農分離以前のもので、平時は槻の沢にあって耕作と軍事の訓練をし、いざ合戦となると住居を引き払って



馬場柿

居を引払って兵糧、武器を携えて城に立てこもる手筈だったと思われる。城といっても簡単なもので臨機にあり合わせの材



直昌つつじ (ひかげつつじ)

木等で周囲に柵を立てめぐらせ、防戦する程度であったのである。『予陽大野軍談』には当時の事情を

久万太田辺り山嶮しうして、その峠に城を築き、から堀、草屋根の風情とはいえども、攻撃する時は大石大木の箇切れを転ばしかけ、竹槍を走らかし、矢を射かけ、大敵といえども女童まで防ぐ便となりと語っている。

大除築城については「予陽河

野家譜」に、

久万山は伊予土佐両国の境にあって山高く谷深く峻しい地形をしている。住民も多くこれまで他国の侵入を受けることもなく平和な生活を楽しんでいたのに、先年来土佐の一条家が兵をくり出して防戦に困難となつて来た。そのため後湯築城主河野氏は久万山明神村に新たに山城を築いて大除城と名づけた。大除とは敵をはらい除くという意味で、宇津城主大野安芸守直家を迎えてこの新城の城主として久万小田地方の守りとした。これ以来、土佐よりの侵入もなく住民も安らかに生活している。

と記してある。また「大野直昌由緒聞書」には

小田五千石の地は日野・林・土居・安持の四人で支配していたが、土佐の長宗我部元親がたびたび侵入して苦しむようになった。四家は長宗我部に対抗

するような勇将を推戴する必要があると話し合ったが、河野氏は年若く一家中をおさめるのに困難な程だから頼みにならない。さすれば宇津の大野殿をおいて外にない、家柄といい人柄といい申し分なしと決議して、久万十八家の舟草・明神・山之内・政岡・平岡・森・立花・菅家・梅木・山下ら河野氏の家人に申し送った所、みな喜んで賛成したので、直家を大除城に迎え入れ、何れも家来としての忠誠を誓った。

と記してある。

ここに出る直家は大野系図にはないが、おそらく朝直と同一人と思われる。大除築城は年代不明であるが、郷土史家伊藤義一は「大除築城は長祿寛正、つまり一四六〇年のころであり、あるいは朝直のとき大修理を加えたのではないか」といっているが、浮穴郡大田郷上川村庄屋大野和五郎直尚の書き残した天明年中の覚書にも「寛正五年ニ久万出雲入道ノ跡三百貫ヲ領シテ大除に砦ヲ構ヘラレシハ相違無之モノ也」とも記されている。

6 紀伊守利直

大野系図に見える朝直は、「予陽河野家譜」及び庄屋文書類では安芸守直家とあり、土佐長宗我部氏に対抗する将として衆望をになって迎えられる大除三代の祖とされているが、別にさしたる軍功も記されていない。あるいは、このころ久万・小田郷は小康を得ていたと見るべきであろうか。朝直の死は永正一六年（一五一九）七月五日のことで、行年四九歳、法名を口称院殿唯心即是大居士という。

天明六年（一七八六）上川村庄屋大野和五郎直尚の手記に、久万町万徳山口称院法然寺は、天正文祿のころ加藤嘉明の臣佃十成が、往古入野村にあった口称院という小堂を移し再建したものと伝えるが、入野村の口



利直が菅生山大宝寺に寄進した梵鐘の刻文字（現在石手寺所蔵）

任御示現
彼鐘自河内国来臨也
菅生山大宝寺別當
大旦那伴朝臣大野
紀劬利直一結衆
東西真俗施主等
天文十七戊申年十一月吉日
三十貫合作涼岸
妙一
吉久

称院というのは朝直の法号からみて、彼の建立したもののか、あるいはその墳墓ではなかったかと推定している。

三四代利直は明応二年（一四九三）三月一日、朝直の長男として生まれた。母は河野通秋の娘、幼名を高寿丸、永正二年（一五〇五）一三歳で元服して弥二郎、右衛門太夫、紀伊守に任官している。

天文一三年（一五四四）、五二歳のとき長男友直に家督をゆずったが、その友直が翌年死去したため、利直は、再び大除城主となり、天文一七年、友直追善のために菅生山大宝寺に梵鐘を寄進している。

この鐘は現在石手寺にあって、国の重要文化財に指定されており、鐘銘に、「菅生山大宝寺一山大法主、大旦那伴朝臣大野紀劬利直」の文字、また、「天文十七戊申十一月吉日」の文字があるから、疑う余地がな

い。

この前後、利直は周布郡劍山城主黒川通俊と結んで久万山勢を率い、井内峠を越えて戒能通運みちのぶを小手が滝城（川内町大字井門、中野の東方、標高五二〇呎）に攻めて激戦を交え、その用水を絶ったため城は陥った。通運は逃れて、更に大熊城（川内町大字則之内、惣田谷、標高九〇五呎）に拠ったので、利直・通俊らは進んでこれを囲んだが、この山城は一ノ森、二ノ森、三ノ森と三段の急峻をなした要塞で、攻めるに困難をきわめた。遂に空しく囲みを解いて退いたが、勝に乗じた城兵の追撃が急で、黒川通俊は馬を射られて遂に自殺し、利直はかろうじて久万山に引きあげた。

この戦いは利直と浮穴郡棚居城主平岡房実の不和に原因し、平岡の一党である戒能を攻めたものといわれる。果たしてそうであればこれははなはだ不義理な戦いである。平岡房実は河野の一族であり重臣、その娘は利直の妻となって四男直昌を生んでいる。いわゆる政略結婚というものであろうか。義父との不和は特別な事情あつたのか、あるいは戦国の弱肉強食の自領拡大であつたのであろうか。

その後も黒川通俊の子通堯は、利直に協力を求めて大熊城を攻めたが、平岡及び久米郡岩伽良城主和田通興が戒能を援助するため目的を達することができなかった。

越えて天文二二年（一五五三）、再び利直は兵を起こして平岡の支城である拝志郷の花山城を攻めて、これを陥れ、家臣森家継に数百騎をつけてこの城に置き、凱歌を奏して久万山に帰った。

この年、利直は四男直昌に家督を譲り、天正八年（一五八〇）七月一日、八八歳で死去した。法名を威徳寺殿儀山道雍大居士という。

7 山城守直昌

直昌なおしげは利直の四男、享祿三年（一五三〇）二月二十八日に大除城で誕生、母は平岡大和守房実の娘、幼名を熊王丸といい、天文十一年に一三歳で元服して弥六郎、また九郎兵衛尉、山城守に任ぜられた。

天文二二年の直昌家督相続については、ちょっとした内紛があつたようである。長男友直が夭折し、二男直秀、三男直澄は妾腹に生まれ、四男直昌が正室の子であつたため兄を越えて大除城主となつたので、三男直秀は大いに憤って中国に立退くなどがあつたが、他の兄弟はみな直昌に従つたという。

ところで、直昌は利直の弟であるという説がある。「予陽河野家譜」卷之四に、

直家一男紀州利直早世に依りて二男山城守直昌其跡を相続す。

とあつて、西園寺論文などもこれを探っているが、これは利直の一男友直早世のため、弟直昌が家督を継いだことの誤記であらう。大野系図のほとんどは、すべて利直の子となつており、「予陽河野家譜」も、利直の小手カ滝城・大熊城・花山城の攻略のことを記しており、また石手寺鐘名から見ても、利直早世は符合しない。

さて、三代直昌については、「予陽河野家譜」は、

元来武勇父祖に超え度々無双の誉を抽て、一族幕下四〇余人各擡上を所々に構へ、之に居住す。

と記されているが、彼の代となつてようやく身辺多端となつてきた。

永祿十一年（一五六八）正月、土佐一条家の家臣福留隼人、桑名太郎左衛門は五〇〇余騎をもつて久万山に打ち入つた。直昌は尾首掃部介・船



山城守直昌陣用のどら
(井部栄治氏所蔵)

草出羽守・山内丹波守・
明神清左衛門・梅木但馬
守・渡辺左馬介・越智帯

刀らと二〇〇余騎で奮戦、
防禦にとめて、土佐勢
を退けることができた。

元亀三年(一五七二)七
月に中国毛利氏に属する
苦西・津高・神石・見
嶋・高宮らの一族が河野

に宿意あって八〇〇余騎を分けて攻め寄せて来た。河野方では、伊予
国の総力を挙げて撃退することとなり、直昌は久万・小田両山の三〇〇
余騎を率いて井門郷に打って出た。高井城主土居通利らの一族も手兵一
五〇余人を率いてこれに加わった。八月二日直昌らの軍は中川原の敵を
討ち、三日に北河原で対戦してこれを破り、各所の伊予軍は勝利して遂
に中国勢を敗走させた。

その九月に土佐の長宗我部元親が宇和郡に攻め入ることがあり、この
機に乗じて阿波国の三好氏が織田信長と結んで伊予に侵入した。九月一
二日、直昌は先陣を承り敵と対戦し、大内信泰、中通言、重松豊後守ら
の側面からの援助を得て、寄手を堀江に撃退した。翌一三日敵は恵良城
を奪い、これに立て籠ったので、直昌先陣となって風早郡に向かう途中、
河野郷で伏兵に逢って敗れ、一たびは退いたが援軍を得て進み戦った。
一六日直昌軍は先陣で敵陣に駆け入ったが、士卒共に疲れ果てて味方の

軍と交代した。阿波勢は更に三〇〇余騎の兵船を加勢として北条浦に漕
ぎ寄せて来たが、直昌、土居清良等は防戦につとめ、一七日遂に敵を浅
海浦に追うことができた。

翌天正元年(一五七三)のはじめ、直昌の弟で地蔵嶽城(後の大洲城)の
城主大野直之が長宗我部元親の授けを得て河野氏に背いたので、三月一
八日に河野通吉は、五〇〇余騎を率いて喜多郡に進発した。従う武將
の中に直昌もいたが、折からの雷鳴豪雨にもかかわらず、喜多郡の曾根
宣高の手勢と共に、全軍に先んじて地蔵嶽に急ぎ、肱川をへだてて矢戦
を展開した。全軍その後には続き城兵と対峙して互いに矢戦を交える中、
濁流とうとうとして流れる川中に直昌、宣高等決死の五〇〇余騎は馬を
乗り入れ、敵前渡河して城中に突入して火を放った。このため直之はじ
め城兵は防戦の術を失い、鶴森城(大洲市北只)に退いた。

河野勢は進んで鶴森を攻め、直之方も防戦につとめる中へ、土佐から
元親の妹智波川玄蕃が八〇〇余騎を率いて加勢し、しかも近日中に元親
自ら大軍を率いて来援し、河野と雌雄を決しようといううわさがたった。
そこで河野方は援けを中国の毛利に求め、まず鶴森城を陥れた後元親と
決戦することに決し、早速安芸国に使を送った。

これに応じた毛利方は早速宍戸隆家、吉川元春、小早川隆景に一万余
騎をつけて来援させた。一方、鶴森城ではしきりに援軍を待ったが、元
親はこの形勢を見て仮病をつかって動かず、進退きわまった直之は前非
を悔い河野の軍門に降ったので、身柄を兄直昌に預けることにした。波
川玄蕃も小早川の陣に、自分の死を条件として従兵の命乞いをしたが、
隆景は、今後土佐が河野に攻め入るときは、毛利は大兵を挙げて土佐に

討ち入る旨を元親に伝えるよう命じて、これを助けて土佐にかえした。この中国勢の来援に対し河野家では鞍馬三匹、砂金一〇〇両を贈って謝意を表した。以上は「予陽河野家譜」の語るところである。

8 笹ヶ峠合戦

直之は兄直昌とは四歳の年少で隼人・上総介・右衛門太夫と称し、喜多郡菅田城主となり菅田直之（又は直行）とも呼ばれた。地蔵嶽城主宇都宮豊綱の掣となり、その死後地蔵嶽に住み、郡内の棟梁となったという。

前述のごとく直之は囚人として兄直昌の監視下におかれたが、天正二年（一五七四）小田町で貝足五兩分の地を与えられた。しかし彼はそれを不服として、ひそかに妻子を連れ元親を頼って土佐に逃れ、喜多郡の旧領に帰るよう画策をはじめた。天正二年八月に長宗我部元親が中に立つて兄弟の和睦をはかり、両者は閏八月二五日、いよいよ予土国境の笹ヶ峠で会見する運びとなった。その日、元親は直之を伴って笹ヶ峠甫見江坂に、直昌はそれより五〇町ばかり距った樋ヶ崎まで出向き、互いに使節の礼があつて前進した。このとき土佐の伏兵二〇〇余人が前後から、ときの声をあげ発砲して現れた。不意をつかれた久万山勢はその死傷数知れず、直昌の弟東筑前守をはじめ、喜土、樋口、土居、林、安持、荒川、近沢等屈強の士七〇余人は乱戦の中で悉く討死を遂げた。しかし、直昌は名だたる知勇兼備の名將のこととて、大敵の囲みをもとせせず、士卒を叱咤して奮戦し、遂に土佐勢を切り崩し、一族の尾首掃部、尾崎丹後守、日野九郎左衛門等と、逃げる敵を甫見江坂の東まで追撃し、勝どきをあげて帰軍した。この時、土佐方は長野兄弟寺町左近以下八〇余人が討死したという。こうして直昌は九死に一生を得たが、一族家臣の

大半は討死し、再起し得ぬほどの大打撃を受けた。

以上は、「予陽河野家譜」の記するところである。またこの地方に残る「大野家聞書」などには、更に芝居がかつた表現で、この戦いをえがいており、面白くはあるが全くの作り話であることは、既に天明年間に上川村庄屋大野和五郎が手記に書いてあるので、ここでは省略する。

9 大除城落城と大野氏の末路

上総介直之は帰国の雄志を燃やししながら、なお元親に随身していたが、天正七年（一五七九）河野家が通吉の病死により若年の通直の世となった機会に郡内に帰り、地蔵嶽城に拠って近隣を攻略し、河野家よりの討伐軍をも撃退して、隠然たる勢力を確立した。

天正一〇年（一五八二）には、黒瀬城主西園寺氏（今の宇和町）と争って河野氏の調停で和解し、一二年一二月二四日には、元親の手先となって梶谷氏の居城高森を攻めて抜けず、翌一三年、豊臣秀吉の四国征伐の將小早川隆景の郡内への進軍によって曾根宣高と共に捕えられた。と「予陽河野家譜」は記しているが、直之については異説も多い。

さて、一条氏以来土佐勢の久万山侵攻は前後七回におよんでいるが、地の利、人の和をもってする久万山勢の猛反撃に業を煮やした元親は、遂に中央突破作戦を断念し、遠く四国山脈の東西を迂回する作戦に出た。すなわち、兵二万余騎をもって、阿波・讃岐の両国に進攻これらを切り従え、破竹の勢いをもって東予方面へ迫る一方、宇和方面へも攻め込んだ。この南予方面では相当激しい戦いが行われたが、中でも三滝城主北之川殿紀式部大輔親安の奮戦ぶりとその落城哀話は、今もこの地方の語り草となっている。こうして、宇和より喜多へ侵入した土佐勢は、その

余力をかって浮穴郡に打ち入り太田、砥部を切り従えて、背後から遂に久万山に押し入り、あちこちの番城をかすめて大除に迫った。また、平地部へも乱入し、温泉、久米、野間の各地で河野の本隊と戦い、これを屈服させて、遂に宿願の四国全土をその手中におさめた。

このようにして、元親が四国平定に手間どっている間に、一方、秀吉はいち早く畿内を掌握し、更に兵を進めて、天正一三年七月、小早川隆景を征将とし、三万余をもって四国征伐をはじめた。

元親を中心とする四国勢はこれを迎え撃ったが、新居浜地方に上陸した小早川軍は、東予の諸城を次々と攻め落とし、破竹の勢いで進撃した。この要撃戦で勇名をさせたのは、金子城主の金子備後守元宅を中心とする高尾城守備軍の奮戦振りで、全員壮烈な討ち死を遂げ、古戦場の西条



河野氏の居城湯築城址（現道後公園）

市野々市には、今なお千人塚が残っている。

さて、緒戦に敗れた元親は戦利あらずといち早く征討軍に降ったが、河野を中心とする伊予勢はこれにこりず、全軍を本城の湯築城に集結して籠城決戦の構えをみせた。七月二九日怒濤のごとく押し寄せた小早川軍は湯築城を十重二十重にとり囲み、一カ月にわたってはげしい攻防戦を展開したが城はなかな

か陥ちなかった。奇手の大将小早川隆景は、河野通直の妻が毛利元就の孫娘であることから、無駄な戦いをやめさせようと九月六日城中に手紙を送って降伏をすすめた。城中では早速軍議を開いた結果、今や時勢の流れに抗すべくもなく、全軍涙を吞んで開城降伏と決定、ここに湯築を本城とする河野幕下の諸城は、ことごとく小早川の軍門に降った。

ここにおいて、伊予は全く平定され、秀吉は隆景の功を賞し、伊予の内三五万石を彼に与えた。通直は所領を没収され、隆景にあずけられたが、親類すじの関係もあって、隆景は通直以下を客分として丁重に扱い、そのまま湯築館に住まわせるとともに、幕下の將兵に対しても、「願筋あらん者は申出すべし取次で得さすべし、他国を思う者は道を開いて通すべし、随ふ者は扶持すべし、居る者は下城して居るべし。」と異例の寛大な処置をもって臨んだ。隆景は、また河野、大野等の再興を秀吉にたびたび懇請したが、秀吉は、かつて中国攻めの時、その加勢を河野がけたことを理由に遂に承知しなかった。

再起の望みを断たれた河野通直は、三年後の天正一五年（一五八七）隆景が筑前に移封されるや、そのすすめにより、同年七月九日隆景の出身地である安芸国竹原に落去したが、ほどなく二四歳の若さで病歿し、数百年の伝統をもつ伊予随一の名家河野氏もここに完全に亡んだ。竹原市には、隆景が通直の冥福を祈るために建立したという長生寺があり、その境内には悲運の中に若くして世を去った河野通直の墓が、今は訪ねる人もないままにさびしくたたずんでいる。

さて、直昌は湯築落城後、通直と行動を共にし、通直竹原落去の節は、息子の熊王丸を連れて通直に従い竹原に落ちのびたが、通直がなくなっ

た二年後の天正一七年七月二六日六二歳で彼の地に歿し、東光山薬師寺に葬られた。この前後の事情を「熊大代家城主大野家由来記」は次のように記している。

天正一五丁亥年七月河野大野家無是非城を渡し牢々の身となり給ふ、河野・大野両家城為請取四国中の大名小名松前表より今治迄船揃有之城請取の面々浅野弾正大弼長政・増田右衛門尉、両家之領分受取の大名戸田民部少輔・福島左衛門大輔兩人受取被申候・両家の一家を始旗下家中悉く牢人と罷成、及迷惑旧知又は山中へ忍び申候。

大野本家はこうして久万山を離れ、直昌自身も彼の地に没したが、その一族ないし幕下の諸將の多くは久万、小田の地に帰農し、その子孫はやがて藩政時代の庄屋になったものが多い。

10 大野氏の幕下

大野氏の勢力範囲はおおむね重信川を境に、久万、小田を中心として喜多に及び、更に宇和の北部にも達していたようであるが、世は戦国のこととて、その威令の及ぶ範囲は絶えず流動していたように思われる。

前述のこどく、大野氏をはじめ喜多に起こり、長祿、寛正の頃、日野・林・安持・土居のいわゆる小田四家に迎えられて小田郷に入り、さらに土佐勢の進攻に備えて、船草・明神・菅・山之内・政岡・平岡・森・立林・梅木・山下等、久万一八家の懇請を入れて大除に入った。

大野氏治政の最も安定したのは三代山城守直昌の時代で、伝うるところによると、彼は河野家の執事をつとめ、土佐長曾我部氏に対抗する山の手の旗頭として河野氏の重鎮であった。

その幕下は四八家一箇城といわれ、いずれも本城の大除城を中心に

三重の円陣を描いて、予土国境に向かって展開し、天嶮を利用して、国境警備の山嶽要塞地帯を形成していた。それらの城砦のうち主なものを「大野家四八家之次第」「予陽大野軍談」より拾いあげると、およそ次のようなものである。

| | | | | |
|---|----|---|------------|----------|
| 菅 | 生 | ◎ | 大除城 | 大野山城守直昌 |
| 東 | 明神 | ① | 船山城 | 船草出羽守仲重 |
| 西 | 明神 | ② | 越木甫氣城 | 山内丹波守豊忠 |
| 久 | 谷 | ③ | 葛掛城 | 明神清左衛門里壽 |
| 入 | 野 | ④ | 天神森城 | 梅木但馬頭爲政 |
| 野 | 尻 | ⑤ | 池峠城 | 渡辺左馬介一綱 |
| 七 | 鳥 | ⑥ | 鷹森城 | 越智帶刀通喬 |
| 畑 | 野 | ⑦ | 高藪城 | 船草五兵衛重紀 |
| 大 | 川 | ⑧ | 石本城 | 梅木右馬允政倫 |
| 久 | 主 | ⑨ | 松岡城 | 重頭数馬時保 |
| 昼 | 野 | ⑩ | 若山城 | 菅内蔵允道氏 |
| 有 | 枝 | ⑪ | 高森城 | 佐伯重兵衛惟喜 |
| 西 | 谷 | ⑫ | 城森城 | 中川主膳正直清 |
| 西 | 谷 | ⑬ | 天神森城 | 山下金兵衛俊朗 |
| 窪 | 野 | ⑭ | 真が城 | 森讚岐守義長 |
| 久 | 谷 | ⑮ | 勝山城 | 立林雅楽頭定男 |
| 直 | 瀬 | ⑯ | 勝山城 | 鳥越左門豊祇 |
| 畑 | 川 | ⑰ | (直昌下屋敷)上之段 | 武市近江守三雄 |
| 野 | 尻 | ⑱ | 柳小路 | 大家又兵衛礼重 |



大野氏幕下の番城配置図

| | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|--------|---------|---------|---------|--------|---------|----------|----------|----------|--------|
| 日野之川 | 小田 | 小屋 | 土州境 | 露峰 | 久万 | 日野浦 | 菅生 | 東明神 | 同 | 荏原 | | |
| 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | | |
| 日野城 | 本川城 | 崎森城 | 轆轤城 | 尾首城 | 尻城 | 尾城 | 沖屋城 | 笠松城 | 東町城 | 西町城 | | |
| 日野孫六郎勝友 | 土居下野守方玄 | 林忠左衛門直将 | 林勘解由直任 | 小倉丹後守為秀 | 宮田右京進道後 | 尾首掃部頭直福 | 山口甫順義熙 | 菅新左衛門道雅 | 露口清左衛門吉昌 | 鶴原三郎兵衛慶総 | 正岡右京太夫通高 | 平岡左近房衛 |

| | | | |
|----|-----|----------|--------|
| 町 | 村 | 土居城 | 尾崎七郎家親 |
| 寺 | 赤岩城 | 東筑前守直勝 | |
| 惣津 | 立花城 | 安持備前介頼康 | |
| | | 立花九郎兵衛直周 | |

これら番城の城主は、いずれも大野氏の一族か、または在来の豪族で、常に主家を助けて戦国の山野を駆けめぐり、土佐勢の心胆を寒からしめた武將たちである。

しかしながら、前述のごとく、天正一三年秀吉の四国征伐によって、大除が開城されるや、彼等も主家に殉じて自らの手で城を焼き、下城して、郡内各地に帰農したり、また他家に随身したりして歴史の表面からその姿を消して行った。

11 直昌公位牌発見の経緯

久万町大字菅生榎之沢部落には、古くから大除落城にまつわる数々の哀話が語り伝えられている。幼時よりこの地に育った大野憲は、長ずるに従い、それがあまりにも杜撰マズイであって、史実とはかけ離れたものであることを知り、郷党の一人として、何とか史実をつきとめたいと願うようになったという。そして調査研究に手つけたのが昭和二六年のことであった。

調査とは言うものの、部落に伝わる記録が別にあるわけではなく、古木の生い茂る城跡と往時を偲ぶわずばかりの地名と口碑がせめてもの拠り所で、すべては全く草の根を分けるに等しいものであった。ところが、ほどなくかねて郷土文化進展に心血を注ぎ日夜挺身していた藤井周一、同潤二の激励と指導を受けて資料も次第に整い、昭和二九年夢想だにしなかった四〇〇年の謎を解くに到った。

それは、昭和二八年の秋、筆写中の古文書「大野軍談」から、

大野直昌病に有りて死去竹原奥山田東光山薬師寺に埋葬す永称院殿直真宗昌大居士と送りける。

の条に目がとまったがそもそもそのきっかけであった。

言い伝えでは、直昌は天正二年（一五七四）閏八月二五日予土国境笹ヶ峠の一戦で、長曾我部元親に謀られ悲運の最期を遂げたことになっているが、これは後世の捏造であって何の論拠もないことは、既に史家の指摘する所である。西園寺源透も、このことについて「伊予史談」第六五号の大野山城守と大除城に

通直開城後、隆景の扶助を得て道後の新館に居たが、天正一五年福島正則が湯月城主となりしにより、通直は芸州竹原に移り毛利家の厄介となった。直昌も従うて彼の地へ行ったのであるが、其の年七月一四日通直竹原で病没してからは、直昌の行く処が分らぬ。

と言っているが、事實は湯月開城二年後の天正一五年七月九日、姻戚関係にあたる小早川隆景の好意ある勧めによって、通直竹原落去の節随従して同じく竹原に落去し、その後幾ばくもなくして彼の地に歿している。しかし直昌歿後竹原の地に葬るとはいいながら、四〇〇年も経た今日、果たして当時の竹原に当たる地名が残っているであろうか。いわんや薬師寺と称する寺が残存しているかどうか、また、たとえ薬師寺が現存するとしても、彼の地では浪々の一落武者に過ぎぬ直昌の墓碑等が残存しているかどうかまことに覚束ないものであった。そこで、調査にとりかかるてだてとしてとりあえず広島県賀茂郡竹原町教育委員会及び竹原中学校宛照会したとる、半年ほどたった昭和二九年二月第一報を受け取っ

た。

立春が来たかの様に暖くなって参りました。お元気でいらっしやいますか、随分御返事が遅くなって申訳ありません。当史蹟研究会に広大の先生で西村先生がおいでになりますので、そのお手をわずらわして調査していただきました。同封中の様になっておりますので御通知申し上げます。然し古文書がないので、十分な御返事が出来ず残念ですが不悪御容赦の程

竹原中学校 佐藤 一正

一、当時の竹原と申すのは御地でしょうか。

そうです。長生寺現存、同寺に河野氏位牌あり、別に河野氏墓という古墓があります。しかし竹原は現在の竹原町の範囲に止らず、加茂川沿岸の旧五ヶ村—現在の竹原、下野（竹原町）、東野（東野村）新庄、西野（莊野村）をいうと思います。

二、記録にあります寺（東光山薬師寺）は現存していますか。

現存しない。この附近で薬師寺というのは、竹原町の東隣大東村の内、高崎に薬師寺というのがありますがこれは海岸ですからどうもあてはまらないと思います。他に薬師寺というのはありません。莊野村新庄の善明寺がもと蕨山薬師寺といったことです。竹原奥山田というのが固有名詞でしたら該当するものではありませんが、莊野村新庄は奥山田というのが表現によく合った所ですから、蕨山薬師寺が本光山薬師寺である可能性はあります。現任職柄崎氏は何も記録がないから分らないが、上の可能性は認められているようです。尚、新庄、東野、下野には「南」という姓がかなりあります。

三、墓、位牌らしきものはありますか。

ありません。但し新庄附近には中世墓も二、三あるようですが、どれが何かわかりません。

四、何か記録がありますでしょうか。

全然なし。

五、御地へ参りましたら、何か手がかりが得られましようか。
得られそうに思いません。

それは、予想した通り全く雲をつかむにも等しいものであった。ところが、それから半年もたった例年になく残暑のきびしい九月五日、次のような第二報がとどいた。

残暑が本年は割合にきびしく感ぜられます。其の後御壮健でいらっしゃいますか。お尋ねの大野直昌の件について、再調査の結果をお知らせいたします。本日学校の方に届きましたのでお送り申し上げます。

郷土史がもし出来上っていましたら、一部か二部お送りしていただいたら好都合ですが、よろしくお願い致します。

先般はお人形を送って頂いて誠に有難う存じました。
お知らせまで、暑さの砌お大切に

九月五日

竹中佐藤 一正

先般お尋ねのありました大野直昌最期の地につき一応お答え致しましたが、甚だ杜撰な調べにて其の後ずっと気になっておりましたが、最近確実な事実を二、三調査し得ましたので、この前の回答に代えて新しく回答致します。貴校の郷土史編集に間に合わないかと存じますが、何れ御追補の時には御利用下さい。

一、お尋ねの竹原奥山田薬師寺は現在の竹原町下野にあったことがわかりました。山田という地名は現在ありませんが、かつて山田という地名があったことは古記録で確実です。薬師寺は明治初年迄ありました。その位置も判明しています。現在は全く水田になっていますが、薬師寺の石を附近の民家が石垣に利用したということです。

二、薬師寺にあった仏像類は現在約一軒離れた同じく大字下野の成井部落の観音堂に納められており、その中に大野直昌の位牌がありました。

第三章 大除城と大野氏



直昌位牌

(表) 永称院殿直真宗昌大居士

(裏) 天正一七己丑七月二七日

予州浮穴郡久万山大除城主大野山城守大伴直昌

施主 予州浮穴郡大田上川村

大野和五郎直尚

石塔ハ当寺裏杉垣ノ内ニ有

以上の通りであります。石塔は薬師寺が前述のような状態なので探すこと
もできません。

これ以外のことがもし判りましたら、又お知らせ致したいと思います
が、あまり見込みがありそうにもありません、現地を調査される場合には案内
します。

最後に御願いがあつたのですが、貴校の郷土史ができましたならばお
送り下さい。

文字通り海で針を拾ったのであるが、先方へは一〇月中旬現地に渡り
調査する旨連絡してその準備を急ぎ、とりあえず地元槻之沢部落に、直
昌公奉賛会を結成し、大野伊藤太等熱心な賛同者の後援を得て、その態

勢を整えた。

この間、藤井潤二らは現地調査の実施についていろいろと教示を受け、また藤井周一は高齢であったが、竹原行きを快諾し、一〇月一二日現地調査の途に上った。

最初に直昌の位牌を発見したのは、県立竹原高校の一生徒であった。西村助教・佐藤教諭らは前述の第一報を送ったものの気がすまず、夏休みを利用して、徹底した調査を進めようと計画していた矢先、たまたま竹原高校より夏休みの課題として、郷土調査が課せられ、その結果、前記上成井部落の観音堂において天正年間の位牌が発見されたと聞き、ただちに現地について調査したところ、かねて照会中のものであることが判明したのである。

一行は、町より徒歩で約二〇分の上成井^{かみない}部落を訪れた。かつては香煙も絶えなかったであろう薬師寺の境内も、今では一面の水田と化し、ただわずかにみすぼらしい一軒家が秋の日ざしを浴びて、置き忘れられたように佇んでいる。その家の前を当時の名残りか、俗称薬師寺道と称する農道が上成井に向けて一直線にぬけている。

上成井はせいぜい二〇戸程度の小さな部落である。部落の一番上南斜面の山腹に観音堂がある。予想していたよりも立派な堂で、八幡様と称する小さな社殿と同じ境内にあった。堂内には、それにふさわしからぬ立派な厨子が安置され、その中には身の丈七、八〇センチ程度かと思われる金仏と大きな木魚があり、一見して尋常の堂でなかったことがわかる。古老の話によると、薬師寺は明治初年まで現存していたが、当時の殺伐な世相から、住職が盗賊に殺され、寺もほどなく焼失し（明治七年）その

後再建されないままに、焼け残った本尊や位牌等を観音堂と共に近くの部落に移し、今日に至ったそうで、由来上成井、下成井の両部落では、隔年交替でその維持供養に当たり二名宛の役員をとって年に一度のお祀りをやって来たとのことである。位牌は堂の一隅に歴代住職のものとともに安置され、俗に「浅野さんの位牌」と呼ばれて今日に至ったのである。堂の裏手には歴代住職の墓石と思われるものが五、六基並んでいる。堂の正面に近く五輪塔の一部と思われる石塔があり、そのそばに長さ一丈程度の板石型の石碑が、真中から二つに折れて継ぎ合わさったまま残っている。碑文はほとんど読めないほどに古ぼけてはいるが、それでも「称院殿」までは判読され、おそらく直昌の墓碑であろうと思われるが、確認するまでには至らなかった。

さて部落代表をはじめ観音堂役員に、来意を告げたが、事が位牌のことでもあり、一応部落へ相談してからとのこと、早速部落常会が招集された。

部落側は長時間揉みに揉んだが、一行の熱意に打たれて遂に折れ、「位牌についての記録を残す」ことを条件に、この位牌の引き渡しを承知した。

かくして昭和二九年一〇月一日、公が再起を期して成らず、空しく異境に歿してより、実に三六五年ぶりにその御霊は故山に帰ることができたのである。

そして、地元槻之沢はもとより、町当局、教育委員会等の尽力により、公生前の偉業を偲び、盛大な法要が槻之沢大除神社において行われた。公逝きてここに三六五年、またもって限すべきか。

以上、直昌公位牌発見の経緯についていささか詳述したが、さらに位牌裏面にある「施主大野和五郎直尚」の直昌墓所参拜のことについて触れておく。

彼は浮穴郡大田郷上川村の庄屋で増良とも号した。神仏への信仰厚く、あちこちの社寺を参拝する一方、近傍の社寺の修復を行うなど多くの仕事を残しているが、また筆まめで学識もあつたらしく、その後裔である小田町上川の大野家には、彼の手になる数々の記録が現存している。

ところで、この大野家所蔵の系図中、和五郎直尚の事蹟には、寛政九年（一七九七）八月二〇日彼が五五歳の時、出雲大社、畷島参詣の途次、

竹原東光山薬師寺を訪れ、遠祖直昌の墓所を参拝して茶湯料を献じ、かつ当座の燈明料として金一分を寺僧に託して帰国した旨記されており、この点前記位牌の裏面に刻まれた彼の記録と完全に符合している。

なお、大野和五郎直尚展墓の事に関して、先に伊藤義一が発見した久万町大野貞一郎所蔵の「直尚の手記」は、直昌歿後二〇〇年の當時を偲ぶ貴重な記録であり、参考までに記しておく。

家譜に芸州竹原下山田村と言を尋ね候えは、山田薬師寺と申すは有之と雖も下山田村といふはなしとぞ、之により家系を取出し、東光山薬師寺の住僧に見せ候えは、むかしは下山田村と申つれども、今は下野村と申し此寺地を山田と申す由物語也、石碑は板石境に甚だ粗相のものなり、文字も幽て見ゆるもあり消たるもあれども相違なく直昌の墓所なり、墓所先年は山田十左衛門と言者持来り掃除有し所、今は南庄三郎と言者墓地の主にて掃除いたし来りたりと聞也、直昌家来付に南甲斐之介と言者あり、直昌命終る迄も隨身して、その後彼地に止りたりと被存候、山田十左衛門は先年より其所の地主にて地名を称せし人、持来れる所、南氏其辺を買求めしより、庄三郎家より掃除致し

来りしと被存候、むかしは竹原五ヶ村より念仏、墓所に毎七月入来りし処、一歳口論有て只今は七月一五日下午野村よりのほり五本、一六日大石浦よりのほり五本、一七日下午市村よりのほり八本御して念仏入来り候由に御座候、下市村は則ち竹原町の事に御座候、其町の山に長生寺御座候、河野通直侯の墓所也、小早川侯より建給ふ寺也、通直侯の御法名長生寺殿月溪宗円大居士と申候、その塚は大なる楠木印之由に御座候、右三ヶ村より長生寺にて念仏唱へ、それより山田薬師の裏手直昌の塚へ念仏入れ来り、微少の茶湯料残し置き帰国仕り候。

二 郷村の起こり

農村も室町時代となると畿内では、農民の力がのびて来て、寄合いなどが行われ用水、入会地の管理、犯罪の防止などについて取りきめをしたり百姓請といつて、村が領主への年貢を責任をもって請合い納めることなど、自治の生活ができるまでに成長している。これは一村にとどまらず郷村制と呼ばれるように荘園のわくをはずした自然的な村々の連合にまで拡大されるのであるが、それは先進地帯の例であつて、伊予の村々はどうであつたか、平野部と山間部の相異もあろうし、史料にも乏しく研究が進んでない。

浮穴郡の名が古文書にはじめて見えるのは、天平一九年（七四七）の大和国法隆寺の資材帳であり、九三〇年代にできた和名抄によると浮穴郡の郡名を「うきあな」と読ませており、次の四郷があげられている。

井門郷 拜志郷 荏原郷 出部郷

この四郷が今日のいずこにあたるかを考えてみると井門郷は松山市の森松、石井地区、拜志郷は、重信町のもの、拜志村地区、荏原郷は、久

谷地区、出部郷は、砥部地区と考えられる。

そうみてくると浮穴郡四郷は、すべて下浮穴郡に属するもので、今日の上浮穴郡にあたる郷名はない。

このことから、今から一〇〇〇年以前には、上浮穴郡の地は、まだ開拓されず、ほとんど人の住まぬ所であったとみるべきではなからうか。

天文十一年（一五四四）になると、土州一条氏が兵を率い、たびたび、久万山に打ち入るところとなり、村の頭が河野の屋形に援兵を乞うとあり、このころになると、定住するものがあって、村落の構成があったものとおもわれる。

慶長六年（一六〇二）の史料（南部文書）によると、二名、父ノ川、露峰、下野尻の各村の名がでており、これが今日の村の名のしるされた最初である。

幕藩体制の初期の村々を知るものとして、四代将軍家綱の寛文四年（一六六四）の『寛文印知集』がある。本書は、將軍の代替りに際して諸大名、社寺に与えた朱印状、知行目録の控を抄録したもので、松山領としては、東明神村・入野村・西明神村・町村・野尻村・菅生村・畑川村・北番村の村々があり、大洲領としては、父野川村・露峰村・下野尻村・二名村の村々が記されている。

元禄一三年（一七〇〇）に作られた伊予国村高帳には、東明神村・西明神村・入野村・久万町村・露峰村・上野尻村・下野尻村・上畑野川村・下畑野川村・父野川村・二名村・直瀬村・菅生村など、おおむね、現在の大字部落名が記されるまでに、村落の発達をみたといえよう。